

日本近代文学講義

作家論 その2

先週の質問コーナー



続いて、
先週の復習…じゃなくて
復習コーナー

作家は親 作品は子

作品は自分の息子。一人歩きした自分の息子を再び取り戻したかった……

長瀬談

親 は 自立した子を取り戻せるのか？

子 は 新たな パートナー と 新たな関係をつくつのでは？

先週の質問コーナー



先週の皆様からの
質問にお答えします

セルフカバーという問題

長瀬剛

長瀬 剛(ながぶち つよし、1956年(昭和31)9月7日 -)は日本のシンガーソングライター、俳優。本名同じ。「長瀬 剛」は、談記。鹿児島県鹿児島市出身(出生は日置市伊集院町)。Office REN(オフィス・レン)所属。

デビュー当初は瘦身で長髪のフォークシンガーというイメージで、「遅れてきたフォーク青年」と呼ばれたりもした(長瀬のデビュー当時はすでにフォークブームが過ぎた後であった)。透明な声と繊細なアレンジ、達者なフィンガーピッキングによるアコースティックギターで人気を博し、現在の彼とはかなりイメージが異なっていた。1980年代前半からは髪を切り、同時期に出演していたドラマでの気さくな兄ちゃん振りから、徐々にやんちゃなイメージになっていった。

1988年に主演したTVドラマ『とんぼ』でのヤクザ役が大当たりした。この頃から歌声はますます格れていき、歌詞もハードなメッセージを前面に打ち出したものになっていき、ドラマのイメージも相まって、ハイオレンスなイメージが定着していった。また女性スキャンダルやスタッフへの暴行がたびたび報道されるようになり、1990年代前半にはその人気が絶頂になった反面、ダークなイメージもついて回った。

1980 乾杯(もともとB面曲)
1987 アルバム LICENCE 発売
1988 乾杯 → ミリオンセラ

よい作家論の例

高橋英夫 「夢幻系列」

夏目漱石の初期作品

振幅が大きい = 作風が様々
「我が輩は猫である」= 文明批評
「坊っちゃん」= 青春小説
「夢十夜」= 幻想小説

それは、なぜか？

作家論の二つのタイプ

作家的原理の抽出

一見ばらばらに見える作品にも、統一された作家の原理が存在する



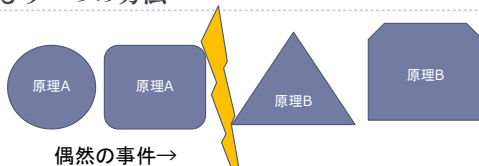
原理論の欠点



上記の作品群を作っている間、作家の原理には何の変化もないことを前提としている

でも、それって本当？
長い人生で、考えが不変？？？

もう一つの方法



作家の実人生におきた偶然の変化を「出来るだけ」考慮する

高橋の漱石論

漱石の初期作品の振幅は
作品内容の多様性ではない

むしろ

文体の多様性である

高橋の漱石論

当時の漱石の文体は
「写生文」の影響下にあった

写生文＝正岡子規の提唱する文体
(漱石の親友)

「写生文」自体が、完成概念ではなく
生成概念であった

高橋の漱石論

「写生文」が矛盾をはらんだ生成過程であった証拠(例)

「山会」 写生文の勉強会

写生＝リアルにそのままの描写
↑矛盾↓
山＝技巧的なクライマックス

